

---

# 全裸から始まる物語

あるかでいあ業

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

全裸から始まる物語

### 【Nコード】

N4096J

### 【作者名】

あるかでいあ業

### 【あらすじ】

幼少のころ全てを失った漚。その後家族と友ができたが…

行き先は男子校。顔をそむけて生きられないのが運命だけれども待ちつけるはハーレム？ それとも…

これは主人公である漚と、漚を取り巻く人々との物語？

ただいま内容を変更中

なので更新は勘弁して

# 1章 第1話 THE MAGICIAN (正) (前書き)

素人同然であるが故に色々指摘して欲しいと思います。

## 1章 第1話 THE MAGICIAN (正)

私の世界は色がない

私の世界は音がない

私の世界は広がりが無い

それでも私は生きている・・・

これは聴覚・視覚・肢体不自由者の物語

昔から不自由だった。

幼年期の虐待により私は言葉と音を失った。

家の中で監禁され、父の陵辱と母の暴力の日々…

アルカリ性の薬品をかけられて視力さえも殆ど失う。

ある日、決死の思いで脱出。虐待を逃れた私は…全裸で車に撥ねられた。

この事故で、私は右半身の感覚が半分まで落ち、走ったり、急に動くことも…なにより利き腕の機能すらも失ってしまった。

リハビリでどうにか左手を扱えるようになったものの、腕の機能が左右非対称であることから、手話を話せなかった。ゆえにコミュニケーションは筆談となる。

私の名前は真田 澪

真田家の養子である。

私は今まで長い間同じ土地にいたためしがない。

真田家の家長である父四郎は天文学者であり、物理学者である。母は、自然科学者であり、哲学者である。

二人とも親戚はおらず、そのためか必ずどちらかについて世界中を回っている。

7つほど離れた兄・雪雄は、外国の大学で法学を学びつつ、NGOで海外を回っている。

母は、再婚者であるが、15歳で兄を生んだツワモノである。

しかも誕生日に陣痛が始まり、その一日後、日が変わって30分経たないうちに兄を生んだという。14の時には子供を作っていた計算である。

そのときの彼とは結婚したそうだが、大学に入るときに死別したそうなの…

10年後に父と母は、とある学会で出会い、2年半の交際を得てめでたくゴールインした。

その際に、何の因果か私はこのトンデモ夫婦に引き取られたのだ。

『お前の体で通える高校はここしかないぞ』

私は担任の石塚に呼び出され手に文字を書かれた。

そして目を凝らし見たものは…『海星高校』と書かれた男子校のパンフレットだった

私は女ですが…

ノートでの会話。時間がかかるが唯一といってもいいコミュニケーションの仕方である。

『しかし…お前の学力や移動距離からしてもここがベターだろうよ。』

1年後には共学になるそうだ』

考えてくれたのはうれしいが、根本的問題がある。

だけど男子校はさすがに…

私はか弱い女であって、そんな野獣の群れに飛び込んでいくほど愚かではない。

『留年よりましだろう』

そういった石塚は、「してやったり」という雰囲気だった。

結局は、いける高校がないために、なし崩しに受験することとなった。

## 1章 第1話 THE MAGICIAN (正) (後書き)

今まで書いていた異端の魔術師は強引に終わらすことが決定しました。

次はこっちに全力を注ぐと思います。

## 2話 PAGE OF WANDS (正)

海星高校を受験する日になった。

「それじゃ、いつてらっしゃい」

両親は海外の学会に出発しているので、ヘルパーさんが挨拶をしてくれた。

時刻は8時15分。海星高校は家から歩いて30分の所にあるが、私の歩くスピードから考えるとこれくらいにでなければならぬ。

玄関を出ると、手を繋がれる。私の世話が生きがいと断言する親友である霧島霞である。

『おはよう。昨日はよく眠れた?』

『うん。昼の一時に寝て、朝の6時40分には起きた』

『寝過ぎだ』

手文字でのコミュニケーション。

それと同時に“スパーン”という良い音が頭からこだまする。

【う、痛いよ】

私は右腕を霞に向ける。

「撃つな撃つな」

霞が何やら騒いでいるようだ。

【ジョーダンなのに】

私はそう思った。

いつものような朝。これで緊張も解れたな。

霞と共に受験会場のクラスへとついた。

この高校を受験する女子は、どうもほぼフリーパスで合格できるとの触れ込みがあった。

今回はあくまで共学への実験。しかしだからと言って好んで野獣の群れに飛び込む人はいないだろう。

そのためか、やはり女子は少なかったようだ。私のようなケースに、先生方も驚いていたそうだが、私の義父や義母は世界的にも有名であるがゆえに、覚えてもらえた。ちなみに霞はあいさつ回りで忙しかったそうだ。

面接も終わり霞と一緒に帰る。

霞の叔父は、海星高校に出資している。また、創設に一役買った御園生家の血縁だ。挨拶回りもそのためだと思う。しかし裏の顔は、旧指定暴力団霧島組の女若頭である。

途中、霞が銀行へ行くというのでついて行った。

霞が今月の分け前を銀行に入れ、帰ろうかというところで不穏な空気が流れた。

「動くんじゃねエ…金を出せ」

どうも身の程知らずの三人の銀行強盗が押しかけてきたようだ。

霞は動かない方がいいと思ったのか、おとなしく捕まる。

その際、3年前に手に入れた義手に、こっそりとナイフを手渡してきた。

そこにいた客は、全て一纏めにされ、縄で縛られている。

約一時間はたつたと思う。周りの反応が、霞の顔に集中している気がした。どうやら気配からして少し恍惚とした表情で縛られているようだ。

「おいっ、てめえ！死にてえのか？」

犯人は霞の髪を持ち上げ強引に立たせたようだ。霞が立った時、“ダンッ”と床が振動した。

どうやら行動開始：ターゲットを滅殺 ジュノサイド する！ だ  
そうだ…

霞は隠し持ったナイフを使い縄を解いたようだ。霞は懐に入っていた改造エアソフトガンを取り出し発砲している。ちなみにこれは、ただの銀玉鉄砲だが、弾丸が銃から出た時の初速が音速を超えている。

しかし発射できる距離が十m程しかないのが欠点だ。実はそれ以上の距離では玉が融解するほどの速さである。そのため弾が貫通するというよりも、融解熱で敵を倒すというオリジナルらしい。ちなみに玉が体内に留まると、大変な目にあうそうな…

近距離で攻撃する霞を私は援護するために、私は義手の一部を外す。フハハハハ。実は一部を外すとガトリングとなっていて、自己防御用にあか剤弾を発射できるのだ！

私が発射したこのこの弾（あか剤弾をこう呼んでいる）により、犯人は抵抗不能となった。

ちなみに、犯人逮捕に協力したとして感謝状をもらえたものの、「やり過ぎ」と嚴重注意された。霞は正体がばれずにホッとしていた。私たちはインフルエンザ対策と称した防毒マスクを偶然しており、無事だったが、他の人は30分間クシャミ等が止まらなかったそうだ。

2話 PAGE OF WANDS (正) (後書き)

話に出てきた義手のギミックはまだある。  
これからどんどん出すつもりです。

### 3話FOUR OF CUPS(逆)

男子校ですか…

昔の私は男に対しては特に恐怖心があつたっけ

今ではチャカをちらつかせてメンチ切られても物怖じしないのにね・

・

私はふと昔を思い出した。

「今日から貴女が生活する場所。『霧島組』の屋敷になります」

決死の思いで脱出してきたときに最初に出会ったのは霞の姉貴分の磯貝櫻花だった。

私はその時はもう今ののように外界を感じることが出来なかったので、

雰囲気で誰かに会うんだと漠然的に思った。

「磯貝さん…そいつは？」

「ああ、ちよいとねえ。チヨーさん。ちと、お嬢の所に案内して…

いやいいよ。あたしが案内するから、ちと親方さんに説明してほしいんだ。あたしがいないとどうしようもないからねえ…」

チヨーと呼ばれた男は、奥に引っ込んで行く。

数十分後…

「櫻花姉さん。親方様がお呼びだ。霞お嬢様も居られる」

さつきよりも、いかつい男が呼んだ。

「さあ、行くかね…」

私は手をつれられて部屋から出て、奥の間へ案内された。

「櫻花よ…ここがどこかわかっているのか？」

親方と呼ばれる男は、神妙に問いかける。

「親方。しかし、霞お嬢様の教育を任されているものとしては、同年代の子が一人いるのがよろしいかと…独りでいるお嬢様を見るのは忍びないです」

「ふむ…名をなんと？」

「それが…私は保護しただけです。しかし、この子はしばらくして里子に出したほうがよろしいかと。この子にはここで生活するのは危険かもしれません」

櫻花は、経緯を話した。

「ふむ…ところで名はなんと」

「私もわからないけど…とりあえずお嬢と逢わせてみるかね…」

「お嬢様に合わせたい人物がおります。客人ですので丁重に」

霞はこの言い方に驚いていた。「親方様」の一人娘であり組を背負うために教育を受けてきたが、自分に客というものは今までなかった。跡取りとはいえ、まだ権力などない自分に何をするのかと思っていた。しかし客間に連れてこられて考えは変わった。

客間には同年代の容姿の女の子がいた。つまりは友としてこれから付き合っしてほしいという親方の差し金と思った。ソレに苦笑し、挨拶を交わそうとしたが、注意事項を囁かれて絶句した。

「お嬢様、彼女は目もほとんど見えませんし、耳も聞こえませんが喋れたそうです。声帯も潰れております。医者にも見てもらわんと判りませんが、口もおそらく利けないでしょう。それだけは注意してください」

霞は人生で始めて、フリーズした…

あの時の霞は面白かったな…

実は初対面の霞の雰囲気は私にとってではじめて『温かさ』を教えてくださいましたのかもしれないと常々思う。

【冷たい牢獄から脱出したとき保護してくれたのは磯貝さん。だけれども暖かさを教えてくれたのは霞だけ】だから私にとって霞は特別。それは真田家に行ってから変わらない。

これから二人は一緒に歩むことになる？ いや、いつか私たちも別れる時が来るだろう。

そのとき私は耐えられるだろうか…

## 4話 THE FOOL 正

「バレンタインデー」というものがある。  
決して「ヴァン・アレン帯」ではない…

女性が男性に告白する日だとも言えるが、お菓子業界の陰謀とも言える日である。

私はなぜかいつもこの日にすることがある。  
「墓参り」である。

いつまでも降り続く

雪は降り続く

たとえ私が埋もれても

身動きが取れなくなっても

ただただ降り続いている

わたしが薬品により目が不自由になったことは述べただろう。  
そのいきさつにふれておこう。

私には妹がおり、同じような境遇にあった。

私はせめて妹だけでもと思い、妹だけ逃がしたことがあった。

結果、妹は運悪くつかまってしまった。

逃れられなかったのだ。

結果、私に対しての見せしめとして殺された。

まだ幼児であったのに…

私に対しての虐待はその日を境に数年間加速的に激しくなって行っ

た…

私だけ結果的に助かり、妹は死んだ  
私たちは両親が戸籍を作っていなかったため公には居ない者であつた。

助け出され、私は戸籍をもらったが、死んだ妹に戸籍はない。  
だけでも妹の墓は私が作った。  
たとえそれがどんな形であつても私の肉親の墓である。

義父や義母に見送られ、霞と共に霊園へ行く。  
何度目の墓参りだろうか…

私はここに来ることを義務としていた。  
毎回ここにきて泣き叫ぶのである…

啼いて一年の楔を落とし、ゼロに戻って一年を過ごす。  
これが私の過ごし方なのだ。

『行こう。もう良いよね』

霞は数時間泣き続けた私を地面から起こしてくれる。

そして私の妹の墓に花を添えてくれる。

泣いている私を後ろからずっと見てくれる。いつもこうだ。何も言わない。

だから私はこの日、霞にお茶屋さんで団子を買つのだ。  
ささやかなお礼として…

霞はなぜかいつもこの日だけこう言うのだ。

「Ich liebe J·aime·Amo·Ayαπ?·???  
?·?? ? ? ? ? ? ? ? ? ? ?  
」

私には意味がわからない。

そして抱きしめてキスをせがんでくる…

いつも私はそれを避けているが…一向に止める気配はない。

…少し嬉しいので言えないが。

## 5話 JUSTIC(正)

【寒い】

近年稀にみる大寒波が、2月も終わり3月に入ろうかというこの時にやって来た。

私たちは卒業式を一週間前に控え、今日は予定演習を行うのだが、交通機関も軒並みマヒし、歩道も歩くのがやっとで、電車、バス、等はとてもじゃないが乗れない状態であった。

ここは一応雪国ではあるが、近年の温暖化によりここ5年ほどは雪が降っていない。

しかし、土日に降り積もった雪は明けた今日、とんでもない事になったようだ。積雪量が4メートルを超え、さらに電車の人はいないそうだ。なんでもレールが破断し、復旧の見込みが立っていないそうだ…学校側は急遽その人に限り卒業証書を郵送することに決めたそうなの…

いくら仕方がなく、卒業させなくてはならないとしても…これにより卒業生の約半分がこれなくなるとはどういうことだ？

そんな調子で4日経った。

さらに不幸は続いた。

季節性インフルエンザと食中毒がこの県で流行ってしまった。

そのために、全校休校。卒業式が取りやめに…

突っ込みどころ満載なこの事態が一ヶ月続いた。

お上の皆さんは何をやっとるんだ！と私は叫びたくなった。

しかし、そんな中で不穏な空気が流れていたにも事実だった。霧島組と昔から対立していた海部組との抗争が激化していた。

ある事業を共同でやっていたのだが、仲介役の中島建設が倒産したのが2年前。それからというもの、受注されたものの納期が凍結。利権をめぐり裁判中なのだが、最近では刃傷沙汰にまで発展していた。そこで、霞と私が交渉役となった。

霧島組の跡取りと、世界的に有名な夫婦の養子。主に交渉は霞が専門だが、私はボディガード兼、相手側の暴走を避けるための手札として乗り込んだ。

「海部さん、ここは引いてください」

霞が凜とした声で言う。

「霧島さんよ。それはできねえ相談だと何度言えば判るんでえ。大体だなあ、あそこの土地の権利は最初からうちの組のモンにあった。そこを強引に手えだしてきたのはそっちだろうが」

「しかし、それを組同士の抗争に持ち込んだのはそちら。筋が通っていないのはどちらだい」

「子供が受けた仕打ちに対して親が何とかするのは自然じゃねえか……」

「ちよつと良いですか？」

私はにらみ合っている二人に対し、急いで返事を紙に書く。筆記体の場合、普通、人は読めないため、霞が代弁している。

「なんでえ」

「親が子に受けさせる仕打ちもあります。自ら解決したいと思っていることも貴方は棚に上げていないですか？ もしそうなら親として恥を知らないさい。子供は親より優秀になるものです。親はそれを見守るだけで良いんですよ。それともそんなに信頼していないのですか……」

私の書いたことに対し海部組の親分はしばらく沈黙した後……

「まいったあ。一本とられたな……」

そういつて帰っていった。

結局海部のほうは優秀だったようで、交渉失敗として後で霞に怒られた。

でもきにしないのが私のJUSTICE

## 6話 THE DEVIL（逆）

ただただ広がる闇の中  
私はそこに蹲っていた

「ないてるの」

彼は言った。

私は『彼』を見ることができなかった。

想像しているしかない。私の妄想が創造した虚像かもしれない彼を…  
私は待っている。

この闇を解き放つ光を…

「ん」

ハンモックから起き上がり、伸びをする。

時刻は5時。いつもどおりだ。

テレビをつけ、おはよう！ スバツとSUPER目覚まし とい  
う番組を聴きながら、朝ごはんを用意する。

今日は、焼いた鯖、おかゆライス、味噌汁という組み合わせの和食  
で決めたみた。

食べ終わると、片付けをし、朝の連ドラを聴き、ギミック装備の点  
検をする。今日はロマンに走ることにし、義手の武装はロケットパ  
ンチで決めたみた。

8時ごろから朝に始まる連ドラを聞く。洗濯等をし、気がつけば1  
1時。そろそろかな… と思ったら、私は… 寝ていた。

玄関からチャイムが鳴る。しかし私は気づくことはない。

ドカツと言う音とともに、たたき起こされる。

霞が起こしてくれたのだ。

しかし痛かったので、慌ててスケッチブックを取り出し、霞の頭を殴っておいた。

私は寝癖を治し、家を出るのだった。

引つ張られるように高校へ。途中昼ごはんを食べる。30分で15杯の牛丼（特盛）を私は注文し、霞は牛丼（並）を食べた。それでも12時30には間に合った。

わたしは遠くのもが見えないし、聞こえないので、こういった式典ははつきり言ってつまらない。

とりあえず私は早く終わることを願うのであった。

願いがかない、なぜか早めに終わった。何でも何人か倒れたそうだとりあえず私は教室に向かうことに決めた。霞は違うクラス（学科が違う）なのでいないことが心配ではあったが、霞は案内してくれた。私はないよりましな眼鏡をかけ、校内を回り、とあるクラスに入った。そして、一年間暮らすこの雰囲気を感じて。

暫くしていると、霞に声がかかったらしい。新入生の制服を着たものが、いつまでもいることに興味を持ったこここの教員が話しかけてきたようだ。

私たちはなぜか職員室に案内された。

「君たちだね。ここ海星高校初の女子生徒は。私もまだ新任したばかりで、しかも3月まで女子大生だったんだ。私は御前崎良子。この先生らはよくわからないけれど、とりあえずよろしく」  
かなりフランクな人物だったことに驚いている霞の雰囲気だったが、

私は読唇術でしかわからなかったので、かなり曖昧にしか判らなかった。

「霧島霞。こっちは真田漣。私の恋人だ！」

『よろしく』

私は鉛筆でスケッチブックに書く。

「ん？ 同性愛者なの。あなたたちはここでは苦労するよ。かなりかわいいし……」

と、御前崎先生は私を注視したよな気がした。

「あなた…目が…それに言葉を話していないわね」

「漣は弱視で聾啞。あと、右半身も悪い。義手なんだ。慣れるまで時間が掛かるが慣れたらいいやつだ。自然に接してほしい…後、一応あの子、性同一性障害で、体は男性だ。まあ色々あって、『女性』そのものだけねど」

「真田漣…まさか真田博士夫妻の養子の…」

「そうだ。もしなんかあったら私の組じきじきに力チコミをしてやるっ」

御前崎先生だけでなく、周りにいたほぼ全ての人間が、冗談だろう？といった顔をしている霧囲気になり気まじくなったが無視した。

7話 SIX of PENTACLES (正)

チユイイイイイイイン

今度はこの音

カンカンカンカンカンカン

警鐘が鳴る

声が出ないが悲鳴が上がる

一枚

また一枚…

少しずつ爪が削れ剥がれていく

動けない…

逃げ出せない

血が吹き出る

気を失う

それを見下ろすのは残虐な微笑み

笑い嗤い嗤い咲いワライ

隣ではくぐもった声

「んぐつんぐう~~~~~」

声にならない悲鳴を上げ者を加えさせられ

る少女

助けることも助かることも出来ない永久

の地獄

悪夢から目覚める。時間的にはあまり余裕がないが、シャワーを浴びてから家を出た。

今日は独りで登校する。何となくそんな気分であつた。学校に着き、とりあえず教室へ向かう。教卓の前の私の席に座ると、本を読み暇をつぶした。

LHRの時間となり、教室内がざわつきだした。全員男の中女は私一人である。

担任の先生が入ってきた。

「おはようございます。私が担任の小鳥遊悟です。一年間よろしくお願いします。担当教科は古典をやらしてもらっています」

「あ、それと机に貼つてある名前は、私が名前を憶えるまで剥がさないでください。それでは出席をとります。相木将さん……」

先生は次々に名前を呼んでいく。聞き取りにくいことこの上ない。

「真田澪さん」

私は呼ばれたのだが、気づかなかつた。

「真田澪さんはいないのか？　って目の前にいるじゃないか。どうした？」

そこで私は自分の名を呼ばれていることに気づいた。

私はスケッチブックに『はい』と書いて、高らかに見せた。

とりあえずそれで通じたのか、先生はほとんど名を呼んでいき、そのまま生活についての注意事項等でこの時間は終わったのだが、小鳥遊にすぐ呼び出された。

そして、何とか手文字を覚えてもらった。

『さつきは聞き取れなかつたのか？』

小鳥遊先生は疑問に思つたのか質問してくる。

『完全に聞き取れるのではないの。ある一定の音域で強弱や高低の差がない声や音なら聞き取ることが出来る』

この答えに納得しているが理解していないような顔をして、先生は去っていった。

授業が始まって、いちいち先生は私の対応に苦慮していた。私は決して声を理解していないわけではない。一定の音程なら聞くことが出来る。しかし、言葉は強弱高低で意味も別れることが多いため、違った意味で解釈することが多いのだ。ただそれだけだ。

これを補うために私は負の遺産の力で補っている。負の遺産とは虐待時代の多重思考。逃避のために使っていたこれで、さまざまな意味の同じ音の言葉を取り上げ、文章にしていくな。

私はこれで今まで並の成績でいたのだった。

暫くはうるたえる姿が続くんだと思いつつ、私を特別扱いしてほしくないと思うのだった。

周りにいる生徒も、一人だけいる女子だが、対応に苦慮し、なかなか近づいてこない。

私はひそかに思っていた逆ハーレムに思いを馳せ、同時に無理な話だと思っていた。

7話 SIX of PENTACLES (正) (後書き)

注意書き

透は、『聞き取れない』のではなく、『聞き取れる領域が狭い』聴  
覚障害者です

## 8話 STRENGTH (正)

「今月中までに部活を決めてください」

今日の朝礼時に小鳥遊先生が言った。

昨日の六時間目に集会があり、改めてここの部活が色々あることがわかった。

何せその集会の部活紹介だけで1時間30分は費やされていたのだ。しかし、どうやらそれぞれがあまりに多いこと。そして少数精鋭化が図られていたことで、何処も人手不足のために、今回入部するものが少なかったところは予算の都合上『廃部に陥る』ためにみな必死なんだとか。

「サバイバル部：大日本帝国憲法研究会：宇宙物理学研究部？」

隣にいた川田君がしきりに首をかしげている。

『どうしたの？』

「あ…真田さん。いや、色々部活があるけれど、なんか変なんだよ」私は目を細めて部活申請用紙を見る。そこには確かに変な部活がたくさんあった。

『専門的なものから、時代遅れなものまで…普通にありそうなものもあるけれど、確かにこれは…』

私も啞然とした。

『ところで何処に入るつもりなの？』

「僕も悩んでるんだ。それより…いいの？」

周りは私を見ていた。

【次は体育か】

私はあわてて出て行った。

「今日の体育はマラソンだ。フルマラソンではなくハーフ20キロだ…」

所々から「は？ ええええええええ」だの「正気ですか？」だのの声

大変だねえ、教職も…

私は聞き取れずのんきにボーっとしていると、後ろにいた東海林君が、平坦な声で、20キロマラソンと教えてくれた。

私も確かにそれは辛いと感じた。それだけ走るほどの体力は確かにあるが、<sup>「任務」</sup>の時のためにそれだけの体力をつけている。今使わうわけにはいかない。

中には体力馬鹿が喜んでいるが…冗談ではない。

とにかく私が反対と意見すると、皆も反対と言い出した。私はふと思った。私って<sup>「女王様」</sup>とまあ、どうでもいいんですが。

とりあえず400メートルトラック5週の2キロマラソンとなり、とりあえず皆完走し、走り終わったら自由になった。

私が本気を出さずに4位に食い込んだことで大半の人はへこんでいたが…

走り終わったら自由時間となった。私はやることなくボーっと過ごした。

やる事がなかったなので、皆が見ていないうちにシャワー室へと向かった。

服を一通り脱ぎ、誰もいないのにバスタオルを着用して、シャワー室の扉を開けた。

私はお風呂にはいると周りがほぼ見えない。

とりあえず鍵を閉めて、シャワーを浴びる。

<sup>「水じゃないか？」</sup>

冷たかったが、火照った体にはちょうどよかった。

義手を脱着しているので、ぎこちないが、どうにかシャワーを浴びる。

体の所々の傷痕。そこに水滴が当たるたびに傷むが、その痛みにはもう慣れていた。

「そうは見えないけれど」

「！！！！」

声が反響していることで、私はそこに人がいると気づいた。なぜ気配が読めなかった。

そんなことを思い、ぐるぐると思考がまとまらない。

「湯加減どうかしら」

何処からともなく聞こえる声。私の頭には危険信号が出ていた。

私はたとえ武装しているものでも冷静に見ることができるが、こと無防備なようなときは別だ。今は全裸である。普通に羞恥心というものよりも、それだけで、私は脅えてしまう。

「怖い怖い怖い怖い怖い怖い怖い怖い怖い怖い」

私は失神していた。

目が覚めると、私は着替えさせられて膝枕されていた。

「起きたの？ ごめんなさい。驚かせて」

ふと、顔を上げる。私は少しだけ驚いた。

「貴女は…女生徒なのですか？」

「貴女が始めて…いや、貴女も初めてなのね」

その顔は、儚くて綺麗だった。

## 8話 STRENGTH (正)(後書き)

シャワー室の女生徒の正体は次回です。  
きまぐれ更新ロードですがどうぞよろしく

9話    F O U R    o f    C U P S (正) (前書き)

新キャラ登場

役職：裏生徒会会長

名前：竹の子彩華

## 9話 F O U R o f C U P S (正)

私はタオルを体に巻いたまま膝枕されていたことに気づき、とりあえず着替えることにした。

「…大丈夫？」

私がすごく慌てている様に見えたらしく、心配そうな顔で見てくるが、気にせず着替えた。

「…何か言ってほしい」

とりあえずメモ帳とペンを服から取り出しそれに名前を書く。

「…真田澪ちゃんね。それでどうしたの？ あの様子じゃのぼせた感じではなかったけれど」

「それより…貴女は？」

「なぜここ（男子校）にいるか？ ね。私は本当は姉妹校の「静怜高校」に通っていたんだけど、とある 事情でここに通うことになったの」

「そんな事情があったとは…すいません。不躰な質問をしてしまつて」

「それよりも…さすがに冷えたわ。あなたは大丈夫？」

「平気です」

「そう…私は今からもう一度シャワーを浴びるけれど…一緒にどう？」

「そう。それじゃあ一緒に入りましょ？」

「酷い傷ね…最近ついたものもあるようだけれど…消えていない痕がここまで…」

それは昔の…そこはだめ… ■ ■ ■ ■ ■ ■ が ▲ ▲ ▲ に ×

× × × × した時。 ○ ○ ○ ○ して出来た…

そこも…そこも…だめ…

彼女が私の体の到る所に在る傷痕を確認するたびに、私は抉られていく。

そのどれも私が引きずる傷痕だった。

思わず両腕で頭を抱え蹲ろうとし…判っけていても突如と来る右腕の喪失感に苛まれる。

「あ…あああああああああ」

抑揚のない声で、それでも私は悲鳴を上げる。

ふと、私の背中に柔らかい感触が…

羨ましいと思う余裕もなく、彼女は言った…

「我慢しなくても言い。なきたいときに啼けばいい。とりあえず…

そろそろ服を着たほうがいい」

「え…あ」

私は赤面し、慌てて服を着替えた。

彼女が去っていく。私の視力では判別のつかないところで彼女は言った。

「失礼するわ。ここでは貴女の本来の本質を出さないほうがやはりいいわ。何かあったら私に言いなさい。別棟5階の一番奥の部屋に昼や放課後にいるから…これからよろしく」

とりあえず着替えようかと思ったとき、ふと、さつき自己紹介したメモ帳を見ると使ってなかった所…そこには文字が書かれていた。

裏生徒会会長：竹の子彩華

貴女をメンバーに入れるかもしれないわ

「たけのこさん？」

着替え終わってもこの苗字？ は特に気に掛かる。

これが彼女との出会い

後に言われる「シャワー室の出会い」だった。

## 10話 TEN OF SWORDS (逆)

『部活見学に付き合って』

私は霞に強引に連れて行かれ、剣道場へと足を運んだ。

「私が剣道部主将だ。君たちか？ 剣道部を見学したいというものは」

風格漂う人物が取り合ってくれた。

「はい、二人で…」

「参ったなあ。ここは女子は採らないんだ。いや取れないんだ。齧った人なら判ると思うが、小学生とかまでならともかく高校生では男子と女子との体力差等がありすぎるからなあ…」

「…ならやりましょうよ。袴と面以外をつけてやります。竹刀は持ってますがね」

「ってどこからだした」

霞が何処からともなく取り出した三本の竹刀を見て、彼はたじろいだ。

「おい。朝野、岸田。相手をしてやれ」

「オレたちっすか？ 彼女たちと？」

「朝野、諦める、あの顔はどうしてもやれっていつている」

「それっじゃあ…防具は？ って言うか着替えるのか？」

主将さん言葉を発すると、周りの雰囲気が変わった。

「ひそひそ…女子の生着替えか？ やっべー、オレ興奮してきた」

「結構かわいいしスタイルも…悪くねえからなあ。最高だぜえ」

周りからはあはあする声か聞こえた。私は制裁を加える。

「…いいよね。霞」

「遷。判ったわ。彼女から試合をします。三本勝負でお願いします」  
「判った。岸田。揉んでやれ」

すると…

「…言葉を履き違えると犯罪者だね」

霞の声が剣道部全員に突き刺さった。

私は霞から獲物をとる。私ははっきり言って異端だ。大学で始めて解禁となる二刀流。普通は片方の腕に大太刀、片方に小太刀というのが普通で、小太刀で防御し、大太刀で責めるのだが、私は違う。両方とも小太刀。小太刀二刀流である。しかも普通よりさらに少し短い。元はCQC（Close Quarters Combat 近接格闘）であるからおさらだ。

「二刀なんて対戦するのは初めてだ」

どうも岸田さんはそう呟いたようで、首相さんに「何事も経験だ」なんていわれていた。

「始め」

戸惑う岸田さんを尻目に試合が始まった。

「ておおおおお」

「……………」

ダン、カツ、キュキュ、ダンドン、

「てああああ」

「……………」

カツ、キュキュ、ダン…

私は一撃離脱のスタイルで攻める。岸田さんは狙いに來た私に対し、いなす。この攻防がずっと続いていた。

一本目、二本目も同じスタイルであった。

一本目は足が滑ったところを狙われ、銅を入れたが二本目は裁ききれなかった岸田さんにお返しの銅を入れてやった。

そろそろか…

「は」

三本目開始と同時に私は仕掛けた。

「じめ」

パーン

右の籠手に逆手で握った左の太刀が入り…

「勝負あり」

終わった。

岸田さんは一步も動かず、理解できたのは霞だけであった。

「ナンドナンドなんなんだ」

「見…見えなんだ」

ざわ…ざわ…ざわ…

「次は霞の番…」

興奮冷めやまぬまま霞対朝野の対決となった。

「始め」

「面っ」

スパーン

面が決まった。

「二本目…始め」

流石の浅野さんも守りから攻めに転じてきているようだったが、霞は攻めも守りも鉄壁だ。

突進してきた浅野さんをその力を変えて竹刀で一回転させ、宙に舞う浅野さんに体制が不利ながら突き、面、籠手、胴の順でどれも有効打をいれ、浅野さんは衝撃で失神したようだ。

「…勝負あり」

剣道部は呆然としていた…

「つまらなかった。私と対等に戦えるのは凄だね」

帰り道、霞は乾いた笑いで言った。

「皆怠惰で日々平穩に生きているから感覚も鈍るんでしょう？ 悪いけれど助けて…いや匿ってほしいのよ。暫くでいいから」

【え？】

後ろから声がして思わずドキリとした。

聞き取りにくいがこの雰囲気は…前に似たものを味わったことがある。

「もしかして彩華さんですか？」

その声の主は、裏生徒会の「彩華さん」だった。

10話 T E N O F S W O R D S (逆) (後書き)

漣&霞無双

次回から話の本筋に入る(予定である)

## 11話 KING OF SWORDS(正)

「あの…あなたは…」

私は知っているが霞は彩華さん知らないの、少し躊躇した口調で彩華さんに話しかけている。

「え…とこの子に用があるの」

そんな霞をスルーし、彩華さんは私の腕に抱きついてきた。

急なことで私も思わずどきどきする。彩華さんの行動は読めない。

「お嬢様あゝどこですかゝ彩華お嬢様あゝ」

彩華さんを探しているような声がしている。耳が悪い私でも聞き取れるあせった声だった。

「あの…行かなくていいのですか？」

「…とりあえず逃げるわ」

彩華さんはそう言うのと、私の腕を取り、逃げ出した。急なことで私は転びそうになりながら彩かさんと走る。霞はそれを追う様な形で、2〜3キロほど走った感じの所でようやく彩華さんが止まってくれた。

「いきなり走るんだもの…それで漣に何のよう？」

霞はいきなりの展開にご立腹だ。しかし私もよくはわからない。

「追っ手から逃れるためについ…私が知っていて、かつ追っ手側が知らない人といれば逃げ切れるかと思って…悪かったわ」

「…漣が聞き取りやすい音域で話すってことは、漣の知り合い？」

それなら…私は霧島霞。関係は…なんともいえないけれど親密すぎるって言うことは自覚しているわ。あなたは…？」

霞は彩華さんに挨拶しているようだ。

「竹の子彩華。学校での役職は裏生徒会会長よ。彼女とはちょっと前に知り合ったの。警戒しないでもいいわ。それよりも、匿ってほ

しいの」

切羽詰っている彩華さんの様子から、私たちはとりあえず霞の家に行った。

「なるほど。貴女があ霧島組の若頭ですか…」

屋敷に入つての彩華さんの第一声はそれだった。

「…裏のことですか？」

霞は警戒しつつも彩華さんに探りを入れたようだ。

「裏？ 表裏一体ともいえることです」

「というと？」

「私の家は学校の理事…いえ創立者の家系です。知っているかもしれませんが、私の家系では様々な事業を吸収し、グループを大きくしてきました…分家も分家、血も途絶えた私の家系では、本家の意思は絶対です。しかし本家は、交流しているうちにはいいのですが、とたんに冷たくなるのです。数十もある分家というのは…特になんらかで疎遠になると、権力で束縛して、道具のように扱うのです。分家といつても、本家が勝手に縁を切っていく上に、逆らえないのです」

「家の権力争い…ですか」

「家督を継ぐ…とかそういうものならいいのです。私たちの家では、分家同士を本家が遊びのために争わせたり、殺したり…私はもう家に帰りたくない…帰れない。帰ったとてわたしは…学校の中なら生徒も大勢いるからかろうじて安心ですけど、家にいることも危険なの」

感情が高ぶっているのか、よく聞こえない。けれども、学校で見せていた雰囲気ではない。畏まっていはいない自然な彩華さんに、少し私は驚いた。

『霧島組《ここ》で預かれないの？』

私は霞に聞いてみたが、危険と即断されてしまった。

「…それで澪ちゃんの家を暫らく泊まらせてほしいの…」  
「??????」

「…澪ちゃんちって何処？ 霧島さん」

「家からは遠くないです。暫らくしたら行きましょう」

「そう。わかったわ。澪ちゃん、よろしくね？」

「へ？ えーっと…」

「暫らくの間、澪ちゃんと一緒にすごすのよ」

あまりの展開についていけないが、彩華さんが私の家に居候することになった。

# 11話 KING OF SWORDS(正)(後書き)

次回から

漣と彩華の同棲生活！

霞も混ざって妻妾同衾？

スタートです(噓)

## 12話 SEVEN of PENTACLES (正)

「ここが濤ちゃんの家なの…」

霞と別れた私は、彩華さんを連れて自宅へ帰った。

彩華さんは少し戸惑っているようだ。

「それにしても…大丈夫なの？ 迷惑はかからないの。今更だけどかきかき

『うちの人は基本出張してるし、兄は海外だから』

「海外つてのはわかるけど出張つて？ 親は忙しいの？」

彩華さんは疑問に思ったらしい。

「真田つて名では判らない？ 真田四郎・由起子つて言えばわかるでしょうか…」

「…まさか！ 真田夫妻の？」

「天文学者・真田四郎。哲学者・真田由起子つて言えばわかるわよね」

「国でもトップクラスの学者夫妻…なるほど。貴女が」

私はこの言い方に少し？ を浮かべた。

「少し興奮しちゃって…霞さんから言われてたことを忘れてったわ。ごめんなさい。聞き取りにくくて」

「続けてください。私の言い方も聞き取りにくいにお相子です」

「私が小さいころのパーティーで真田夫妻に逢ったことがあったの。そこで養子の話をしてたから…かすかに覚えてただけだけど」

私は驚いた。これも何かの縁なのだろう。

私は家に入り、彩華さんを案内すると、彩華さんはキッチンへ向かい、料理を作るといつてきた。

私はお言葉に甘えてご馳走になることにした。その間に義手の調整

を行う。

義手を弄っていると、彩華さんに呼ばれて食卓へ向かった。

「どう？ ふろふき大根、余ってたポトフらしきものを改良した煮物、冷奴、あとご飯と味噌汁なんだけれど」

彩華さんは私を見て、感想を待っているようだ。

「とりあえず…いただきます。おいしいです。久々に自分以外が作ったものを食べて、一人じゃない食卓です。ありがとうございます」

「そうなの？」

「私は基本一人で過ごしています。昔も今も変わりませんよ」  
彩華さんは少し驚いたようだ。

【話しても・・・いいか】

『私は虐待を受けていた。妹も…私はその被害で不自由なの。この家に引き取られてからも実際は育児放棄。でも前よりはましだった。少なくとも暫らく兄はいたし、忙しい両親の代わりに霧島組の皆さんに遊んでもらい、鍛えてもらえましたから』

「…そう。でもね。貴女はいつまでそうしているつもりなの？」

私は彩華さんが何を言っているかわからなかった。

「…わからないならそれでもいいわ」

始めは好奇心だった。纏っている雰囲気がつっても強い人に見えたからかもしれない。しかし違った。

「あの子…壊れているのね」

数日前の朝刊を見てはつきりした。彼女は壊れている。

霞っていうあの子の親友さんに感化されたのかと思ったが違った。

彼女は妹への自責の念と幼児期のトラウマ。この二つで何もかもが壊れ、修復できないままなのだ。

トラウマだけならあんなふうにならない。妹のことを吹っ切らせないとともに壊れる。

光をほぼ宿さない目。不自由な体。思ったような抑揚がない口。

それでも怖いから閉じこもっている人はたくさんいる。

だから攻撃的になる可能性もなくはない。

しかし…あの子は多分、自分の害となるものに対しためらいもなく「殺す」ことだろう。

「お風呂沸きましたよ」

だから…

「一緒に入ろう。澪ちゃん」

私はせめて…この子を人間らしくしてあげよう。

私は…この子に惚れたのだから。

### 13話 FOUR of CUPS (逆)

彩華さんの提案には驚き、躊躇してしまった。

いや…私のトラウマを抉ったといってもいいだろう。

「ああああああああ…」

私はまた蹲ってしまう。怖いから…だから

「大丈夫、嫌ったりしないから」

彩華さんのこの声は信じられなかった。

脱衣所に着く。すると彩華さんの目が変わり…

「さあゝぬぎぬぎしましょうねえゝ」

彩華さんが手をワキワキしながら近寄ってくる。必死の抵抗も無駄に終わり…

「いやああああああああ」

あっという間に脱がされてしまった。

私はせめてもの抵抗で義手を外すところまではいいが、あっという間に風呂場に担ぎ込まれた…

「さ、彩華さん。見ないでよう」

「いいじゃない。綺麗だよ」

私の体を見てそんなことを言うこの人をなんとなく信じられなかった。

「こんな傷だらけな体…きもち悪いですよ」

「ロボットみたいに平坦な口調ではわかりません。ソレ二声が小さいわ」

「こんなふうにはかなせないことをしているのに。いじわる」

「…かわいいわ。その見上げて目をつるつるしているところ。食べ

「ちやいたいくらいい。食べていいわよね」

「へ…なんですか。そのわきわきした手は」

「この出会いを神に感謝します。いただきます」

「え…いやああああああああああ…」

40分後…

「うう…穢された。こんなにいいようにされたのは久しぶり。もうお嫁にいけない」

「何よう…いい湯だったじゃない。それにお嫁になら私がもらってあげるわよ」

「それってどういう」

「さ、早く着替えて…手伝うわ」

「いじめる？ いじめる？」

私がそういて見上げると、彩華さんは鼻血を出していた…

「ナイトキャップティーでも飲みながらパジャマパーティー」

茶葉はアッサムC・T・Cを使い、ミルクティーにしてみました  
台所でお茶を蒸らしつつ思わず歌ってしまった。

「彩華さんは、私と違いロングヘアーであるため、乾かすのに時間がかかっている。その時間を利用し、紅茶を淹れる。」

「あら…ナイトキャップティー？ パジャマパーティーでもするの？」  
髪を乾かし終えた彩華さんは、少し驚いたように見えた。

「驚きました？ 義父母が紅茶好きでして…それに私は今からだとこのほうがいいかと思って」

「いただくわ」

彩華さんはそういうと、牛乳をレンジで温めていた。

「…ホントはインディアンミルクティーがいいんだけど」  
彩華さんはちよつとがっかりしているように見えた。

「シナモンが切れていたの…すいません」

「いいわよ。イングリッシュティーで」

それからというものの、私は1時間くらい彩華さんに質問や相談をしていた。

いままでのこと。高校のこと。妹のこと。トラウマのこと。

話すと尽きない。いつの間にか泣いていた。

泣き疲れた私は、そのまま眠りに着いた。

「この子は闇が深い。死にたいと何度も思つて、それでも妹を思い、壊れ果て、さらに壊れて生きている。なのに…私はこの子を利用しようとしている。この子を裏切ろうとしている。助けるだけ助けてもらつて、私は助けるそぶりを見せつつも傷つけ、離れていくしか出来ない。なんて…酷く、醜い」

この子とは一緒にいたい。そうすると私は悪魔にでもならないといけない。

少し恥ずかしかったけれどあの子…。。。。なのね…

この子をとらなくても同じことだ。問題は、堕ちるところまで堕ちる時に、このこと離れなくてはならない。

決断は…まだ先。せめて今はこの子に安らかな寝顔を…

## 14話 SIX of CUPS(逆)

「おはようございます」

「ん」

なに？ まだねむい

「ただいま朝の5時15分です。

ゆさゆさ

「ふみゃあゝ…うん」

「まだ寝ているので…とっておきの事をしたいと思います」  
ちゅっ

「目覚めのキスをして起きませんね…では」

舌を絡ませ、もっとディープなキスをする。さすがに息苦しいらしく、だんだん目覚めてきたようだ…

「んんゝ…むゝむゝっんふむう…んゝんゝ…」

さすがに苦しそうなので唇を離す。

「…おはようございます。彩華さん」

「目覚めのキスはとうだった？」

ベットのそばにあるメモ用紙を取る  
かきかき

『ディープでした』

「気持ちよかったんだ？」

彩華さんのその言葉により、完全に意識が覚醒した。

【知らない】

私はそのまま階段を下り、台所へ向かう。

「…まってえ」

2階から彩華さんの声が聞こえるが無視した。

「ごめんなさい…あんまりにも寝顔が穏やかだったから。昨日の事もあったから」

朝食を作り出すと彩華さんが必死に謝ってきた。こう言われるとなんもいけない。

「朝食…出来たから」

「そうね…いただくわ。ついでにシャワーも戴くわよ」

ご飯を食べると、彩華さんはバスルームへ向かって行った。

私はタオル等を用意し、一緒に入るのだった。

「あれだけ早く起きたのに、出るのはこんな時間になるのね」  
結局家から出たのは8時だった。

「それにしても…その本は何？」

私の手から最花さんが取り、めくっていく。しかし普通の人にはこの本は何を書いてあるかわからない。私が手にしている少し厚い数冊の本。それは点字の本なのだから。

# GRUNDLE GUNG ZUR METAPH

YSIK

DER SITTEN

1785

Immanuel Kant

「イマニエル・カント著・道徳形而上学原論」

私が適当に読み始めた本だ。

「分厚いと思ったら哲学書か…しかも点字であればなおさらなの？」

「…私は目は見えませんが、ほんの種類によつては…まあ、

もともと字も大きい幼児用の本とかはともかく、年代が上がるにつれ文字の大きさも小さくなるのが普通ですから。私は指先感覚を取り戻すこと。弱視であること。この二つの障害があつたので読み始めたんです。点字はすばらしい文字ですよ。ある意味万国共通ですから」

「どういうこと？」

「点字っていうのは、殆どの国で同じブライユ方式をとっています。確かに単語と意味、そしてその文字を覚えなければならないことは確かです。しかしですね、それ以上に、書く際の法則が万国共通となっているので・・・」

「つまり、文字を覚えることから始めないで、単語の意味を覚えることから入っていきける・・・と」

「盲・聾・啞者。誰でも使える上に、もちろん健常者であっても使える。ある意味で障害がない言語と言えるわね」

「そういえば・・・なんでしゃべれるのに筆談を？」

「今もそうですが、抑揚のない声でしゃべっていても、聞き取りにくいでしょう？」

「…そうね、下手をすると聞き取る時間のために書いたほうが早くなる・・・か」

「はつきり言えば、そうです。もう一つの理由は、リハビリの一環です。点字のおかげで、『触れる』事で何かを確かめることに關しては感覚が戻っていますが、『動かす』ことはまだぎこちなさがありますから。緊張状態ではなんともないんですが、普通ではかなり麻痺してしまいやすいんです。まあ休めば戻りますが・・・」

「学校が見えてきたわ。私は仕事があるからこれで・・・」

「はい、また昼にでも・・・彩華さん」

# 14話 SIX of CUPS (逆) (後書き)

点字のお話でした。

当初は本文中に入れる予定でしたが、パソコンで展示を打つのは難しく、断念せざるをえませんでした・・・(泣笑)

## 15話 NINE of PENTACLES (正)

「今日の放課後うちの生徒会室へ来て…」

彩華さんは学校で別れた際にこう言っていた。

その日の昼休みにて…

『彩華先輩一緒に食べませんか?』

私は彩華さんのいる教室へ向かい、高々とスケッチブックを掲げる。声を出すのは面倒だし、こちらのほうが迷惑でないだろう。

クラスの男子生徒がそれに気づいたようで、呼んで来てくれた。

「澪ちゃん? どうしたの…」

『一緒に食べませんか?』

私がそう訊くと、彩華さんは悩むそぶりを見せる。

「…屋上なんかどう?」

『いいですよ』

私たちは屋上へ行った

「いい風が吹いてますね」

「そうね…」

「何点ですか?」

「60点くらいね」

「辛口なんですね。私は85点あげたいです」

「…最近の私に吹いている風はあまりよくないのよ」

そう言った彩華さんの顔に陰が映る。実家のほうでゴタゴタがあ

つてそれでもこっちでは平然としている。私の家に転がり込んでからもやっぱり気にしているのか…

私の表情を見て取ったのか、彩華さんは明るい笑顔で

「あなたに会えてよかった。あなたがいなければ…私は壊れていた」  
「私は何もしていませんよ」

「そうかもしれないけれど…私」という存在を見てくれる。私の存在意義を見出してくれているから…」

「そう…なんですか？」

「実家は私を道具としか見ていない。私には何もない。貴女に会えて価値観が変わったの」

「…??？」

「貴女は…屍ね。生きながらにして既に死んでいる。でも、死に存在していないというわけではなく、死そのものが存在意義となっている。それは重い業のほず。けれどもそれに抗って生きている」

「っ…!!！」

彩華さんの言葉は私の心を抉る。しかし同時にその熱は私の心を氷解させていくような気がした。

「全身の傷痕もそう…現代の医療なら殆ど痕が残らずに治せる筈。あえて残しているのが自然。そして貴女の全ては実は偽り…幻影に過ぎない」

私の中の何かが…私を包み込む。

私は義手のアタッチメントを外し、おもわず彩華さんに攻撃しようとした。しかし…それを見透かしたように彩華さんは言う。

「人は常に弱さを隠す。それが普通。でも貴女はそうしない。出来ない。そうしないといけないと縛っているのだから。それは凄いな。弱さと強さは表裏一体。けれどもあなたはどちらも表に出さない…」

彩華さんはそういうと私を抱きしめてきた。

「もう…終わりにしよう。貴女は一人ではないのだから…」

私は気づくと啼いていた。幼いころ、妹を守れなかったあの日から

後悔というものの以外で始めて…私は泣いた。そう。私ははじめて心が温かくなることで泣いたのだった…

「温かい…」

お弁当はすっかり冷めていたが、とても暖かな味がした。

けれども彩華さん…やけ食いなのか知りませんが、そしてなぜカレー…弁当？

「実は…さつき調理実習があつて…」

昼休み中に食べられるのか…そう私が思ったのも無理はなかった。

彩華さんは、10合炊き特大ジャーに入ったご飯と、業務用大鍋に入ったカレーを持ってきていた。

しかし、昼休みをめいいっぱい使い、それだけのカレーを食べきっていた。

いままでのシリアスな雰囲気が出たよ…彩華さん。まあいいけれど。

15話 NINE of PENTACLES (正) (後書き)

カレーネタはONE〱輝く施設へ〱ではなかった…  
ONE〱輝く季節へ〱の「川名みさき」先輩です。

16話 THE TOWER(逆)(前書き)

短かったので少しだけ付け加えました…

## 16話 THE TOWER（逆）

放課後、私は言われたとおり、裏生徒会室にいた。

「今回は20人のトレードです。」

彩華さんは会議を始めると突拍子もなくそう言った。

『トレードって何ですか』

私は質問する。

「トレードって言うのは…この姉妹校である聖籠学園―「せいろうがくえん」（女子校）との生徒のトレード期間が6月から11月にかけてあります。これは主に提携校の情報交換、交流を兼ねたものなのですが…トレードされた人は卒業まで寮に入り、そこで過ごすことになります」

「聖籠高校って？」

私と同じように始めて入ったと言っていた隣の人が発言する。

「N県にある高校よ。私はG県にあるT校かと思っていただけけど…今期は違ったようね。ちなみに私はH県にあるW高校からきたのよ…」

「色々あるんですね…」

「まあ、そんな訳でして……………」

会議は進んだ…

4時間後、会議は一段落した。

「三年生は5人。天谷さん、春日部さん、四谷さん、工藤さん、伊東さん。二年生は8人。躑躑森さんつづじもり八日市谷さんようつかいちや、久寿米木さんくすめぎ、

鈴木さん、一さん<sup>にのまえ</sup>、我妻さん<sup>わがつま</sup>、神子島さん<sup>かじしま</sup>、前伊礼門さん<sup>まえいれいもん</sup>。一年生は7人。西条さん、浅香さん、北原さん、中島さん、八島さん、遊佐さん、幡龍さん<sup>はんにゅう</sup>。以上が半年間トレードに出されます」

「それに伴い、2、3年生の12人は、聖籠高校に移されます。交換式は、5月24日となりますので対象の人には通達をしてください」

会長はそう言うと言退出していった。

「彩華さん……」

私は思わずこの状況を尋ねる。

「このトレードは校則に定められているわ。現に私もこのトレードでこの高校に来たの。まあ、選ばれるのは事情も加味しているから貴女は選ばれないわ」

私はそれを聞いて安心した……が。

「気をつけなさい。特に貴女はね……」

会議室から出るときに渡された紙に書いてあるこの言葉が頭から離れなかった……

数日後……

私はその日は一人で下校中だった。

しかし、その日はおかしかった。

学校を出てから、横断歩道を渡るときに車に撥ねられそうになるは、チンピラどもに絡まれるは、工事現場から鉄骨が落ちてくるわ……と、なんだかおかしかった。

家に入ろうとすると、急に殺気が立ち込める。

振り返ると、黒服？　のような感じのひと……彩華さんに似た気配がした。

すると…いきなり切りかかってきた。

これは序章に過ぎなかった。

16話 THE TOWER(逆)(後書き)

珍苗字を入れてみました

## 17話 ACE or SWORDS (逆)

私は切りかかってきた女に手刀を入れ、気絶させる。

普通のものではない。義手は程よい重みがあるために、容易く気絶させられる。

その勢いで宙を舞う。

そこで愕然とした。

6〜8人ほどに囲まれていた。

今日の義手は近距離専用だった。武装は、小型ナイフとテイザーの発射が出来るタイプ。ナイフは刺せないが切れるタイプでテイザーはワイヤレスタイプ。そのため遠距離武器が相手にあると不利だ。

日が暮れて、街灯だけで、少し霧も出ている。普通ならやられるだろう。そう、普通なら。

私はとりあえず注意しながら走る。

途中で買ったスナック菓子をばら撒きながら、私の周りに結界を張る。

私はひたすら待った。静かに待った。

パリッと言う小さな音。夜の帳の静寂の中、この音は私の耳でも容易く聞ける。

そこに向かいテイザーを発射。倒れる音が聞こえた。

テイザーは4発だけしかない。残り3発。全弾命中をさせることがまず第一条件だ。

後ろからまた音がする。後ろへ発砲。ビクンとしたあと男は倒れた。

気絶させた黒服を踏みつけ、跳躍する。その後ろにいた男も距離をつめて気絶させた。

私はそこで気配を追う。残りは多分…3人ほど。あと一人いるが、戦意がない。どうやらそれは司令塔のようだ。

一気にその司令塔を倒そうと距離をつめようと思った。その一瞬の隙が命取りとなった。後ろからの攻撃を避けられなかった。

私は一撃を受け、義手が切れ掛かる。

とつさにスタングレネードモード（義手を廃棄する時に使う）を起動させ、義手を投げつける。

音響発光兵器スタングレネードを至近で喰らい、のた打ち回っている。

私の感覚は全体的にこれを耐えられるから出来るが、損失も痛い。

しかし仕方がない。

その隙に一気に敵の司令塔に近づく。

私は近づいてみて…私の目を疑った。

雰囲気も似ていたが、まさか…と思った。

なぜ…なぜなんですか。

なぜ私を襲ったんですか？

彩華さん……！！

## 18話 JUDGEMENT (逆)

「彩華さん…なんで」

私はなぜ襲ったのか？という疑問で頭がいっぱいだっただ。

「…私は狙われているの。もうここに入られない。学校はともかく、だから貴女を傷つけて別れるつもりだった…」

「……………」

「馬鹿…なんだよ。私のかかわると不幸になる。私にかかわることは常に危険に晒されることも同義だから。貴女は私には似てないけれど、闇を抱えた雰囲気は、見る人が見れば判る」

この言葉で彩華さんの闇を見た。

「だから…私に接触し、馴れ合いの中で安らぎを感じていた？」

「…正解よ。私の周りにいるだけで、私の家の権力闘争で消される。友達みんな私のせいで不幸になる。私の周りにいるだけで…」

「…私は贖罪の意識だけで生きています。いえ…それ以外に何も見出せないでいる。貴女も同じ。ただ、違うのは、私は自意識をもっていないかった頃からの罪の意識、貴女はそうではない。ただ、それだけ」

「生きることは戦い。でも死ねない。死を望むことが出来ない。私との違いはそれが過去か今かの違いだけ…でしょう？」

「だからって何で私を襲ったのですか？」

それは何よりの疑問であつた。そして私に近づいたことも…

「同属嫌悪？ 嫉妬？ いいえ、そうね…私は壊れていなくて、貴

女が壊れているから…トラウマを狂気に変え、その凶器を武器にしている貴女が…必要だった。闇に落ちる前に知りたかった。自らの手を血に染めることなく、周りを殺し、自らは生き残る。そんな生活が耐えられなかった…」

「…私が望まないで手に入れているこの業を手にしたい？ 戦うことを知らないのに殺すことを知ったから…」

「そうね…」

彩華さん…貴女って人は

「今度から一緒に住みましょう」  
「それを望んでるわ」

その声が悲しかった…

18話 JUDGEMENT (逆) (後書き)

ダークになるつもり・・・

## 19話 NINE of SWORDS (正)

「望んでいるって…」

「貴女には家族がいる。私は入れないの。学者一家の貴女の家は貴女しか基本的にいないと判っていて、貴女に迷惑がかかるわ」  
そう言つて彩華さんは去つて行つた。

彩華さん…あなたはどこに行くのですか？

彩華さんが去ると、私は重大な事を思い出した。

「腕…どうしよう」

暫く片手ですごす事になりそうだ。

明日、義手技師に電話しよう…

朝の目覚めは最悪だった。

いや、いつもどおりだが、私の胸に空白が出来たようだった。

私は空虚で、生きてなかったはずなのに…

この気持ちはなんなのだろう。

私は、片腕がない事でバランスがとりづらい中で、何とか朝の用意をし、学校へ向かった。

「おはよう…ってみんなどうしたの？」

雰囲気、私が教室に入った途端に変わった。  
私は何事もなかったかのように席に着いた。

「う…腕が」

視線から義手がないことに驚いたみたいだ。

「腕…ああ、いつもの義手。いまは修理中だから」  
「そうなのか」

なんだかみんな納得したようだった。

昼休み、携帯電話で義手技師の棟田さんに電話をかけ、今度の休みから義手の設計に着手してもらうことになった。

そして私は、裏生徒会室に来ていた。

彩華さんには、どんな顔をして会えばいいかわからなかったのだが、なぜか足を運んでいた。

「やめて。私は…貴方なんか…」

「ふん、だがね、君は私と組まないと勝てない。貴女の兄、姉、妹、弟…貴女はどうするのです？ 権力闘争で負ければ路頭に迷うか、奴隷のように遣えるか…こんな結末になる可能性が一番あるのは君なのに」

「判っているわ。そう。私が引いたのは最悪のカードだったものね」  
「僕に使えるのならそれを帳消しに出来るのだが…」

「お断りします…奴隷契約じゃない」  
「戦う気がなく、死ぬ気もなく…か」

裏生徒会室に入ると、彩華さんに一人の男が言い寄っていた。

「彩華さん？」

私は何をやっているのかわからなかった。

「それじゃね。彩華。期限は6ヶ月くらいだ。それまでに君を手に入れる」

そういつて男は去っていった。

「何があつたんですか？」

私は彩華さんに疑問をぶつけた。

「ふ…アレが現実。権力闘争に負ければ、とにかく人の尊厳を奪われる。その人についていたものもろとも…それがいまの龍門グループの現状」

龍門グループ

天正4年に始まる。

ただの酒屋土倉であつたが、しぶとく生き残り、明治ごろからは地方で権力を持った。戦後、財閥解体に含まれなかったため、逆に勢力をひそかに伸ばし、国の一大企業にのし上がる。

「なるほど…あそこの継承者の一人ですか…」

「創始者一族の血縁ですが、歴史があると、かえってそれは無駄になり、家ではプライドが固執しているのが現状なのです」

「その血を望み、グループでは力を持たない彩華さんを望む人が多いですね」

「そうよ、物の様にね…」

しかし、その呪縛はなんだか私に似ているようにも見えるのだった。

## 20話 SWORDS 6 (正)

アレから数日後…

家にいるとインターフォンがなった。

ちょうど私は喉風邪をひいていた。

だるい体をおして、外に出ると、あの男が立っていた。

「真田博士はご在宅で… ってきみは！」

そこには彩華さんに言い寄っていた男が立っていた。

思わず私は…

新作義手の性能を確かめていた。

具体的にいうと、思いつきり彼を殴っていた。

「…まさか彩華と一緒にいた君がいるとはね」

『わたしはもともと筆談をけっこうしているんです。声が悪いんですね。だからこうやっているけれど、目も悪いから返答も遅いのは勘弁してください』

「ならなぜ僕だとわかったんだい」

『気配でわかります。それでどういったご用件ですか？』

「真田博士の論文を取りに。でもやっぱりいいないか。何処にいるか消息がつかめなくてね」

「それはどういった…」

「私の名を言っていなかったね。私は髭久彩華ひげ・ひさと一応婚約しているんだ。まあ嫌われているけれど」

（ひげ？ 女でその姓を名乗るのは抵抗があると思うんだけど）

『それでうちに何の御用ですか？ 両親の論文なんてありませんが』  
「そうか…やはりね。真田博士はうちのグループの庇護のもと研究をしているから、たまにこちらでもう発表済みの論文とか、研究中的ものとかを見せてもらっているんだよ。そういえば、真田博士がだいぶ昔に養子を取ったといっていたのは君だったのか」

「あなたに言いたいことがある。彩華さんに手を出すと言うなら私にも考えがある」

「…私もね、怨んでいるのはわかってる。しかし権力というものは時としてどうしようもないのだよ。それに、『家』という概念に縛られた旧家の家庭には、あのような政略婚を行うこと自体が当たり前だ。家が大事なだけだ」

「慣習でどうしようもないのですね…」

「そういうことだ」

沈黙が流れた後、糾弾するように彼が切り出してきた。

「私は彼女は嫌いではない。しかしあんなふうにつき合うのはもうたくさんだ。彼女はそれで諦めているが私は納得できないんだ！」

「それでどうするの？」

「私が出来ることならなんでもしよう。彼女を救ってほしい。彼女の…彩華の心を」

「私の望みは、叶えるのは難しいわよ。私の望みは私の呪縛の解放なんだから」

「よくわからないけれど契約はしたから…私に連絡刷るときはこの番号だ。この紙に書いてあるから。それじゃあな」

この日、彼・髭久との盟約を交わした。  
そして、。。。が誕生した。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n4096j/>

---

全裸から始まる物語

2011年1月11日05時01分発行